

薬用植物園かわらばん

いま、こんな草木も楽しめますよ！
草木に囲まれ心も体もリフレッシュ・・・



2020年
12月14日
第108号

イチョウ（イチョウ科）

園内ではないのですが、隣接する駐車場で鮮やかな黄葉が目をひきます。中国原産の落葉高木で、雌雄異株、1科1属1種の裸子植物、約1億年前の特徴をよく残しているの、生きた化石植物と言われている。

イチョウ葉は現在、欧州において老化防止や老人性認知症に使用する医薬品原料として用いられています。わが国では、医薬品ではなく、機能性表示食品として市販されています。この木は雄株で実は付けませんが、その種子は黄色肉質の外種皮におおわれています。この外種皮には悪臭があり、触ると皮膚炎を起こさせる物質を含んでいます。外種皮を除くと硬い種皮をもつ核（ギンナン）が得られ、更に種皮を取り去った核仁を食用や薬用にします。ギンナンは種皮をつけたまま切れ目を入れて食用油に漬け、強壮薬、鎮咳薬として使用します。ただ、ギンナンには弱いですが毒性があり、1度に多量に食べると嘔吐、下痢、呼吸困難、けいれんなど中毒を起こすので要注意です。

ハッカ（シソ科）

今は本来の花の季節ではないのですが、第一圃場ではハッカの淡紫色の花が見つけられました。日本原産、やや湿った草地や川岸に自生する多年草です。茎の断面は四角で直立し、葉は対生です。戦前はハッカ油を採るため北海道北見地方で栽培されていました。名前は漢名の薄荷の音読みからです。日本でも中国でも、この植物の地上部が生薬のハッカ（薄荷）となり、辛涼解表薬として加味逍遙散などに配合されます。一方、ヨーロッパでは同属植物のコショウハッカ（通称セイヨウハッカ、ペパーミント）の葉が生薬として利用され、芳香性健胃薬、駆風薬として利用されています。どちらも植物全体にメントールを含み、香りでは分類できませんが、ハッカでは節の部分、コショウハッカでは頭状に花が咲くことで、簡単に区別ができます。どちらの種も香料の原料として利用され、様々な食品に配合されます。